

三、諸有衆生

「諸有衆生、其の名号を聞きて、信心歡喜し・・・」

諸有衆生―、この文字には二つの読み方がある。即ち「諸有の衆生」と読み、又「諸有衆生」と読むことが出来る。「諸有」と読めば、男女、老少、賢愚、善悪、貴賤、道俗等、一切の衆生と言う意味となり、如来の大慈悲の一切衆生をもらさず平等に救いたまうことを表わす文字となる。

若しこれを「諸有の衆生」と読めば、「有」は六道輪廻の妄業有るを示す文字であるが故に、諸有とは迷いを示し、諸有の衆生とは六道輪廻の諸の衆生のことである。差別は輪廻の衆生の現相であり、妄業は差別の衆生の本質本性である。いづれにしても、如来本願の対機、大悲の救いたまわんとする所化の何ものなるかを示されたものである。されば『安心決定抄』に曰く、

「法界と言うは所化の境、即ち衆生なりといへり。定善の衆生ともいわず、道心の衆生とも説かず、法界の衆生を所化とす。」

とあり、これ『觀經』の「諸仏如来は是れ法界身なり。」との語の法界の解釈ではあるが、法界とは如来の化したまう境を表わされた語であって、定善の衆生とも言わず、道心の衆生とも説かず、直ちにありのままの罪惡煩惱の一切衆生を召して、本願の対機となし、上は、補処の弥勒より、下は曾無一善唯知作惡の惡衆生に至るまで、全て、これをもらしたまわぬ本願の規模の廣大を示したまい、一人一匹として、名号本願によらずば、到底仏道の成就せざることを示せる文字である。この法界を尽くして、今、「諸有衆生」と呼びかけたまうのである